

## ウェルビーイングは農山漁村から



参議院議員 宮崎 雅夫

最近、「ウェルビーイング」という言葉をよく耳にするようになりました。直訳すれば「よい状態」ですが、一步進んで「満たされた状態」や「(持続する) 幸せ」というようなことを表しています。利益の追求を至上目的としてきた企業経営にあっても、「働き方改革」を通じて「働きがい」の充足を重視する「幸福経営」が注目されるようになってきました。真直ぐな一本の上り道しかないような、経済的な豊かさだけを指した価値観から、心の豊かさや幸福を重く見る価値観を持つように、社会が変わってきたことを承けています。

でも、こうした考え方は日本に古くからありました。近江商人が大切にしてきた仕事の理念に「三方よし」ということがあります。「売り手よし、買い手よし、世間よし」の「三方」がともによりい状態になる、商売をしている者はもちろん、彼／彼女が顧客や社会とともに繁栄することが大切だと説いています。とてもいい言葉ではありますが、いつの間にか見失われがちになってきたようです。

「『幸せ』なんて曖昧で、主観的な、人それぞれに違うものなんじゃないの」とおっしゃる方がおられるかもしれません。確かにそのとおりで、だからこそ幸せ=ウェルビーイングに触れることは、



少し前までタブーのようになってきたのかもしれませんが。

しかしながら、経済的豊かさの獲得を目的にしてきた経済学の分野でさえも、「幸福の経済学」として幸福度の計測が行われています。そうしたところ、国際的な比較で、幸福度は一人当たりGDPの高い国で必ずしも高いとはいえ、所得がある水準以上になると頭打ちになるし、所得が年とともに上昇していても幸福度がそれに従って伸びていかない。そういう現実を前に、幸せ＝ウェルビーイングに寄与する要因は何なのかを見つけることが、ノーベル賞学者も加わる一つの潮流となってきています。心理学者それぞれが説を立てるというのではなく、客観的な指標を用いて科学的なエビデンスで幸せ＝ウェルビーイングを裏付けようとしているのです。

こうした試みを踏まえて、国レベルで望ましい社会の目標として幸福ないしウェルビーイングの向上を掲げるようになってきました。国民総生産より「国民総幸福」を掲げたブータンは有名ですが、わが国でも「骨太の方針 2024」で、誰もが活躍できる、ウェルビーイングが高い社会の実現がビジョンの一つに位置づけられています。教育振興や環境の分野でも、基本計画レベルの方向性や目的となっています。そしてこの目標に向けて、現在の状況を知り課題や向上の度合などを数値化・可視化するさまざまな因子に基づく指標が設定され、政策に生かそうとされています。早くから導入された地方自治体もありますが、デジタル田園都市国家構想の実現に向けて、デジタル庁でも「地域幸福度指標」の活用が動いています。詳細は省きますが、「生活環境」と「地域の人間関係」、「自分らしい生き方」の3つのカテゴリーにそれぞれいくつかずつ、質問に答える主観指標とデータによる客観指標を数値化し、図化して見えるようにしていくことから始めます。

私はこれまで多くの農山漁村をめぐり、そこで暮らしておられる方々にお話を伺ってきました。共有させていただいた時間は何物にも代えがたい価値がありました。そうした機会で、目の前に差し出された優れた産物を目にして、また、参加させていただいたさまざまなイベントのさ中で、あるいは甚大な災害の直後にあってさえ、いつも感じるのは《地域の底力》というような力強さでした。その力の源は地に足が着いたモノやコト、食べ物にせよ祭にせよ水路や農地のたたずまいにせよ、地域の個性と自信から生み出され育まれてきたものと考えられます。ウェルビーイングはこうした力によって成り立つのではないのでしょうか。



そのことは、たとえば「田園回帰」の様相から見てもうなずけます。「田園回帰」が話題になり始めて10年近く経ち、その傾向は定着したようです。最近の調査によると、コロナ禍前と比べて移住者数が増えて2023年度が過去5年間のピークとなった県は24に上ることがわかりました(『日本農業新聞』2025年1月11日付記事より)。

移住者の中心は子育て中の若い世代です。先ほどのデジタル庁の「地域幸福度指標」で、「生活環境」の категорияの中には生活全般にわたる指標がありますが、子育てもその一つに挙げられます。周りの目や手が子供を助ける「地域の人間関係」に抱かれて、「自分らしい生き方」を見つけていく、幼児が親離れをするまでの長い時間、直接的な支援策もさることながら、都会にはない静けさや空気・水の清浄さ、ゆとりのある緑の空間は、四季の移ろいを感じさせゆったりとした時間とともに大事だと評価されたのでしょう。



受け入れる地元側も、ただ受け身で待つのではなく、従来地元からしてみれば当たり前すぎて気づいていなかった側面に外来者が光を当ててくれたことをきっかけに、都会にはない特質として打ち出すことが可能です。これまでともすればネガティブに嘆くばかりだった「何もなさ」や「古さ」は「ほっこり」や「伝統」などとポジティブに反転できるかもしれません。幸せの経済学に言う「幸せの要因」が、案外そんな所に見出されるのかとも思うとワクワクします。また逆に、よけいなものは入れない、熟成させることで高い水準の品質を得られました、というCMがありました。そもそも「ある」ことよりも「ない」ことを愛でるのが俳句や「わび・さび」に象徴されるわが国の美学、すなわちウェルビーイングの姿だったと言う人もいます。

農山漁村は、千年続けて耕されてきた田んぼがあるように、都会よりも長い時間をかけて熟成されてきたことは明らかです。蓄積された時間は経験の厚みを増やします。経験の厚みは、見える・見えないにかかわらず可能性、あるいは選択肢の多さにつながっています。私が専門としてきた農業農村工学も、経験工学といわれるほど現場の体験や見聞、感触、さらには感動とは切り離せません。さまざまな時代にあった多様な可能性や選択肢を知ることは「歴史に学ぶ」醍醐味であり大切さの一つです。



ウェルビーイングな社会とは、さまざまな人生の中でどうしたいかを考える際に、多様な選択肢がある社会だと思います。選択肢を選ぶか選ばないかの判断よりも前に、気になるかならないかの段階もあるでしょう。「農山漁村が気になる」関係は、移住するまでに至らなくとも一時の滞在とかふるさと納税とか、さまざまな形で増え続けてきました。社会の価値観の多様化に伴い、今後も増え続けていくに違いありません。多様なサービスを提供してくれる農山漁村は、多様な選択肢を実現できる潜在力を持っています。

そういう例の一つとして、こんなことを教わりました。官民を挙げて推進してきた農福連携の一場面です。お祝いなどで送られる胡蝶蘭はいくつもの花がきわめて美しい姿を見せていますが、美しさの秘密はその仕立て方にあります。花茎を揃えて曲げるという難しい作業をこだわり行動の強い方に委ねたところ、最も美しく見える角度をずっと保つことができ、品質がアップしたということです。花作り経営という一連の



活動において、いろんな作業群からその人の特性に応じた作業を見つけ出しマッチングさせて、障害のある方々が能力や特性を活かして貴重な戦力として活躍するという、いわば「二方よし」としています。このように農業経営の発展とともに障害のある方々の社会参画をも実現し、その農福両面にわたる成果が実践者に評価されて、農福連携に取り組む主体数は大きく増えてきています。

私はここに新しい社会の原理が見られるように思えました。前述のとおり、農山漁村が提供する多様なサービスの中に、多様な人材の多様な選択肢が実現し始めているからです。誰もが自分そのままに肯定され、他者とつながり互いを思いやりながら、能力を十全に発揮できること。まさに「地域の間関係」で相互にケアされた「自分らしい生き方」、ウェルビーイングです。

もちろん農山漁村は、現状は必ずしも桃源郷とはいえないでしょう。かねてから農業農村工学会と取り組んできた男女共同参画の課題もしかり、基盤となる農林水産業の新たな時代へのグレードアップもまだまだ途上の域にあります。

私は、「食・農山漁村・土地改良は未来への礎」を掲げ、強い農林水産業と活力ある農山漁村づくりに全力を傾けています。これまで述べてきたように、農山漁村は人々のウェルビーイングの舞台であり、可能性の宝庫です。ウェルビーイングな未来に向けて、ともに歩んでいこうではありませんか。

